

# 旬情報

ムソーからの  
お便り



2013年10月号 VOL.42

## 1月のFACE 生産者紹介

小林邦弘さん  
(北海道夕張郡長沼町)

### 甲子園10個分の 田んぼを3人で

北海道は日本有数の穀倉地帯。広い大地と豊かな水を活かして大規模で安定した米づくりに取り組み、作付面積・収穫量ともに新潟県に次いで全国第二位(平成20年~24年度産)を誇ります。

広大な石狩平野に位置する長沼町は、道内でも有数の米どころです。小林邦弘さんは38ha(38万平方メートル=甲子園球場約10個分)の田んぼでお米を作っています。これだけの面積を小林さん含め3人で、特別栽培でやり切るのは大変でしょうか?と聞くと、「手間も機械も省いて何とかやっていますよ」と飄々とした返事が返ってきました。

育苗ポットで丈夫な苗を育て、5月下旬から6月上旬に田植えします。除草剤は田植え1週間後までに1回だけ使用。田植え前の代掻きで田をきちんと平らにして水管理をすることで、その後の雑草の繁殖を抑えています。



8月中頃のゆめぴりか

### 欲張らない 米づくりで農薬削減

かつて涼だった夏の北海道も、温暖化の影響で気温と湿度が上がっていますが、小林さんは殺虫剤も殺菌剤も使いません。

「虫はひたすら我慢です。葉を白く食い荒らして稲の生長を止めるドロオイムシの被害が去年から多くなってきましたが、虫害に負けない丈夫な苗を育て、あとは稲をよく観察して頑張れよと声をかけるだけ。米粒の汁を吸って黒斑を残すカメムシもそこそこ

いるけれど、クモヤトンボもいるから、田んぼの生態系として釣り合いが取れているんですよ」。



あぜに咲く  
絶滅危惧種のミズアオイ

「周囲の農家を見ると、多収量のところほどイモチ病も多い。うちは肥料少なめ、株は小さめ、収量少なめの上に、雑草いっぱい風通しがいいから病気も広がりにくいんじゃないかな」。

じつは小林さんは、動物病院の院長さんでもあります。「普通に暮らしていれば薬はいらない。人も動物も自分で治す力がある。痛い苦しいはなるべく治してやりたいが、天命というのもあります」「農業は毒ですから。今は昔より作物への残留性は低いです。散布する農家は農薬を直接浴びるんです。自分の田んぼを観察せず、農協の指導通りに農薬をかけている人が心配です」。

### 身土不二の思想を、 今こそ

食味特A評価のゆめぴりかの中でも、小林さんの田があるマオイ地区は粘土質と黒土系の中間の土壌と、夕張川の豊かな水に恵

小林邦弘さん(中央)と  
スタッフの小寺さん(右)、渡辺さん(左)



まれ、食味のよい地区として知られています。でも自分の米さえ売ればよし、とは思えません。

「北海道の米を食べてもらうのはうれしいけれど、全国の消費者のみなさんには、自分の住んでいるところの食べものを大切にしてほしい。私たちは食べなければ生きていけないという動きがありますが、身近で主食が賄えないと、何かあったとき食べものがなくなります」。

小林さんの田んぼでは毎年、札幌市内の中学生700人が裸足で田植えを体験。請われれば中学校へ出向いて米作りの話もします。生産する人と現場にもう少し理解を、と願っての取り組みです。



中学生の体験田植え

ゆめぴりかの収穫は9月20日過ぎの予定です。今年の新米を、みんなで分け合っておいしくいただきます。

「ムソー特別栽培米」平成25年度産・新米をP4~5で紹介します。